The Japan Society of Educational Sociology

養護教諭志望学生のジェンダー意識
－教職課程学生への調査から－

池上　徹（関西福祉科学大学）

1．教育社会学研究における養護教諭

教育社会学において、養護教諭はジェンダー意識と非常に強く関連づけて述べられてきた。「学校のお母さん」（深谷　2000[1]）や「保健室のおばさん」（鈴木　1999[2]）といった例を挙げることでわかるように、それは女性役割と密接につながっている。

そもそも、養護教諭自体についての研究も少ない。代表的な研究として、秋葉（2004[3]）によるエスノメソドロジー研究をあげることができるが、秋葉もその中で「教育社会学研究の領域においても、保健室・養護教諭（中略）についての考察されることがなかったのが実情」[4]と述べている。教師研究は数多くありはするものの、これまでそこで養護教諭に焦点が当てられることはほとんどなかったといっていい。

量的調査となるとさらに少なく、先に挙げた深谷による1991年と2000年の調査の他に、秦（2002[5]）による教員調査の中に養護教諭が含まれているが、養護教諭志望学生への調査は皆無に等しい状態にある。

2．教師研究におけるジェンダー問題と養護教諭

教師研究としては、周知のようにジェンダー問題は一つの大きなテーマである。様々な教育社会学におけるジェンダー研究が、学校におけるジェンダーの再生産の問題を指摘し、その担い手である教員を問題にしてきた。例えば教員自身が持つジェンダーバイアスや隠れたカリキュラム、教員組織のジェンダーの偏りなどを挙げることができる。しかしながら、ここでも養護教諭が取り上げられることはなかった。養護教諭が先に述べたように女性役割の中で述べられてきたにもかかわらず、である。

それは教員養成ないし教師教育についても同様で、教科や校種に注目したり、河上や亀田らによる研究（2000[6]）もあるが、養護教諭養成ないし養護教諭養成課程に着目したものはない。

3．養護教諭とジェンダー

以上のような状況は、養護教諭ないし養護教諭養成が全体としての規模が小さいことも影響しているだろう。また、これまでの養護教諭養成が国立大学教員養成学部を除けば、看護系の大学・短大や教育系でも女子短大などが中心であったため、ジェンダー研究としてはそちらの問題がまず先にあり、養護教諭に注目されてこなかった、とも言える。

一方、養護教諭教育学会では、ジェンダー問題はほとんど注目されてきていない。

しかし、最近は共学の大学で養護教諭を養成するようになり、また採用面でも東京都や大阪府で男性の養護教諭が採用されるようになった。養護教諭を女性のみの職種と限定する発想は終わりを迎えたと言っていい。

さらに、ジェンダー研究が指摘した学校の問題を追及していくのであれば、女性役割として語られる養護教諭自身が、どれだけジェンダー・フリーな教育を実践できるかが問われてくることになる。そこでは「お母さん」「おばさん」と語られてきたこととのせめぎあいが起こってくるだろう。

本発表は、そういった研究の方向の手始めとして、養護教諭志望の学生のジェンダー意識を調べるため、発表者が勤務する大学の学生に対して量的調査を実施したものである。

調査票の作成にあたっては、村松ら（2005[7]）による教員志望学生の調査を参考にし、間接的な比較ができるように試みた。

4．調査概要

(1)調査対象者

私立 K 大学において「教育原論」（社会福祉学部・健康福祉学部）および「総合演習」（健康福祉学部）を受講した学生、計 340 名。

(2)調査方法

授業終了時に調査票を配布しての集団自記式質問紙調査。

(3)調査実施時期

2006 年 6 月。「教育原論」では、ジェンダーについて触れる前に実施した。

(4)調査項目

出身高校の型や役員経験、大学の志望理由や教職の志望動機、職業観、親族の教員経験者の有無、ジェンダー観等。

NII-Electronic Library Service

The Japan Society of Educational Sociology

(5)回答者の学科別・性別の属性

人数	女子学生	男子学生	合計
社会福祉学部	47	70	117
健康科学科	172	3	175
福祉栄養学科	36	12	48
合計	255	85	340

5．調査結果

調査結果の中から、ジェンダー観についての質問に関わる結果は以下の通りになった。

(1)他教科免許取得志望学生との比較

まず社会福祉学部の 1 年生で教員免許取得を志望する学生(女子 30 名、男子 40 名)と、健康科学科で養護教諭の免許取得を志望する学生(女子 87 名)で比較した。社会福祉学部では中学社会、高校公民、高校福祉の免許の取得が可能となっている。そのためここでは、教科の教員を志望する学生と、養護教諭を志望する学生との差を見ることになる。

教員志望理由を質問した複数回答の質問では、「比較的男女平等だから」という選択肢を選んだのは社会福祉学部ではゼロだったのに対し、健康科学科では 21 %と、養護教諭志望学生のほうが学校を男女平等の職場と捉えていた。一方で「女性(男性)に向いているから」という選択肢を選んだのも、社会福祉学部ではゼロだったのに対して健康科学科では 7.4 %いて、養護教諭ないし教師を女性向きと捉えている養護教諭志望学生が、少数ながらいることもわかる。

結婚観や様々なジェンダー意識については、2項目を除き統計的に有意な差が認められなかった。差があったのは「義務教育で、もっと男らしさや女らしさを大切にした教育をすべきだ」と、「女性の校長・教頭をもっと増やした方がよい」の2つだった。「そう思う」「少しそう思う」と答えた割合は、前者の質問で社会福祉学部が 36.2 %なのに対し健康科学科が 18.8 %、後者の質問で社会福祉学部が 56.3 %なのに対し健康科学科が 72.9 %だった。健康科学科、つまり養護教諭志望学生のほうがジェンダー・フリーな考え方をしている学生が多い。

(2)養護教諭志望の 1 年生と 3 年生での比較

次に、同じ健康科学科の中で 1 年生と 3 年生で養護教諭の免許取得志望学生で比較してみた。これは 2 年次の「教育社会学」を経てジェンダー学習の前後の変化を見るものである。

結婚観や様々なジェンダー意識については、ほとんどの質問について 1 年生と 3 年生の間に統計的に有意な差は認められなかった。

唯一あったのは、「女性の校長・教頭をもっと増やした方がよい」という質問で、「そう思う」「少しそう思う」と答えた割合は、1 年生で 72.9 %、3 年生で 87.2 %と、3 年生のほうが高かった。

また、「あなたは、『ジェンダー』という言葉を知っていますか」という質問に「知らない」と答えたのは、1 年生の 11 %だったのに対し、3 年生では一人もいなかった。「あなたは『ジェンダー』という言葉を、いつ頃、どこで知りましたか」という質問についても、1 年生でもっとも多かったのが「中学や高校の授業で」の 67.1 %だったのに対し、3 年生は「大学の授業で」の 66.7 %と、教職課程における講義の効果が確認できた。

6．今後の課題

結婚観やジェンダー意識について、1 年生と 3 年生の間に差がないことは、知識はついても行動変容まで至っていない可能性が高く、養護教諭がジェンダー・フリーの担い手となるようさらなる実践が必要と考えられる。

また、本調査は一大学のみのため、国公立・私立の枠を超えて養護教諭志望学生全体の傾向を調べることも今後の課題である。

引用・参考文献

1)深谷和子 2000,「『学校のお母さん』としての養護教諭」『モノグラフ小学生ナウ VOL20-3 心のケアワーカーとしての養護教諭 － 10 年後の全国調査－』,pp.2-3,ベネッセ
2)鈴木邦治 1999,「学校組織の周縁や曖昧空間から視えてくること」油布佐和子編『教師の現在・教職の未来 シリーズ子どもと教育の社会学5』,教育出版
3)秋葉昌樹 2004『教育の臨床エスノメソドロジー研究 保健室の構造・機能・意味』,東洋館出版社
4)前掲書,14 ページ
5)秦政春他 2002「現代教師の日常性(II)『日本教育社会学会第 54 回大会 発表要旨集録』pp.182-187
6)河上婦志子「女性教員『問題』論の構図」pp.265-285 、亀田温子「教師のジェンダー・フリー学習－」pp.309-331 亀田温子・舘かおる編著 2000『学校をジェンダー・フリーに』,明石書店
7)村松泰子、中澤智恵、木村育恵他 2006『国立教員養成系大学における教育・学習活動のジェンダー分析 －大学教員と学生の調査から－』科学研究費補助金 研究成果報告書

NII-Electronic Library Service